



地域社会と連携した課題解決型学習

～「自分ゴト化」と「共感」をテーマにしたごみ問題解決に向けた取組～

大分県立大分商業高等学校 教諭 山下 智史

1. はじめに

本校は、創立105年目を迎える伝統校であり、大分県唯一の商業専門高校として、社会で活躍できる人材を育成するため、実社会で求められる即戦力となる人材の育成を目標とした指導を行っています。生徒一人ひとりのキャリアの成長を意識した実践的な諸活動、たとえばインターンシップや販売活動といった様々な体験的学習活動に取り組み、教室での学習内容を自分自身の目や耳で確かめながら、「士魂商才・質実剛健」の校訓の下、「良き商業人」となるため研鑽を積んでいます。



日々の授業では、生徒の能力や可能性を引き出すため、共通教科に加えて専門科目（マーケティング分野・ビジネス経済分野・会計分野・ビジネス情報分野）の学習を行っています。生徒は、社会で役立つ様々な知識や技能を、日々の授業を通して身につけていきます。学習を深めることで、簿記や珠算・電卓、ビジネス文書や情報処理、商業経済や英語、ビジネスコミュニケーションといった資格を取得することも可能です。高度な国家資格合格を目指したり、上級学校への進学を希望する生徒には、大分大学と連携した学習活動（大商ビジネスセミナー）等も用意されており、個々の生徒の能力や可能性を活かすための取組

みが実践されています。自主性・自律性・協調性を育む各種活動も充実しており、生徒一人ひとりが、部活動や課外活動、学校行事等に自主的・意欲的に取り組んでいます。清掃活動や障がい者支援等のボランティア活動も定期的に行われており、地域社会とも連携しながら学校内外の活動を通して社会性を育む教育が実践されています。部活動には約8割の生徒が加入しており、全国レベルの成績を残している部活動もあります。

本発表は、商業調査部が社会問題をテーマにした課題解決型学習を、地域および企業と連携して取り組んだ実践の経過報告です。

2. 取組の背景

(1) 過去からの脱却

これまで商業教育における実学の重要性を感じ、販売実習、商品開発、地域活性化のための取組など、様々な実践をしてきました。それらの取組を通して、高い教育効果を感じ、本校に赴任してからも、商業教育における実学を実践するため、商業調査部の顧問となり、日々活動に取り組んでいます。本校商業調査部は、全国高等学校生徒商業研究発表大会において、全国優勝した実績もある部活動です。私が顧問となってからは、地域食材を活用した商品開発、地元商店街での販売実習などの取組を中心に実践してきました。その過程で、授業で学んだ知識・技術を深めさせることができ、活動に一定の教育効果も感じてきました。しかし、活動資金や販売場所等の問題で販売が継続できないことなど、活動の限界を感じ、活動内容を見直す必要があると感じました。

(2) 未来への挑戦

平成30年7月に告示された高等学校学習指導要領解説（商業編）では、生徒たちが成人して社会で活躍する頃の時代は、生産年齢人口の減少、グローバル化の進展や絶え間ない技術革新等により、社会構造や雇用環境は大きく、また急速に変化しており、予測が困難な時代になるといわれています。また、進化した人工知能（AI）が様々な判断を行ったり、身近な物の働きがインターネット経由で最適化されるIoTが広がるなど、Society5.0といわれる新たな時代の到来が、社会や生活を大きく変えていくとの予測もあります。

生徒には、予測困難な社会の変化に主体的に挑戦し、未来を予測しながら、生涯にわたって主体的に学び続けていく姿勢が必要となります。商業調査部では、その資質能力を養うため、「課題解決型学習」を通して実践していくことにしました。社会の諸課題に対して、様々な視点で捉え、解決に向けた方策を思考し、実際に行動し、その結果を検証することにより、次の活動につなげていく取組を実践していこうと考えています。

そこで、社会の諸課題の中から、生徒が継続的・主体的に取り組める活動として、SDGsの「11.住み続けられるまちづくり」と「12.つくる責任つかう責任」の視点から、社会の諸課題である「ごみ問題」に取り組むことにしました。

3. 取組の概要

(1) 「自分ゴト化」できる取組

「ごみ問題」は全世界で共通する問題であり、解決に向けて継続的に取り組むべき問題でもあります。また、身近な問題でもあり生徒自身が「自分ゴト化」し、主体的に取り組むことができます。

(2) 「共感」できる取組

ごみの継続的な発生により、今後、日本のごみ埋め立て場が不足していくとの予測があります。大分市には、不燃物の埋立場跡地に作られた植物公園もあり、ごみがこのまま増え続けていくと、埋め立て場の新たな活用が必要となります。こう

した現状は、どの地域でも起こり得る地域課題でもあるため、多くの方々と問題解決に向けた思いを「共感」することもできます。



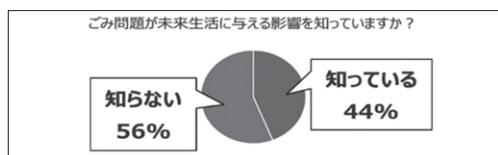
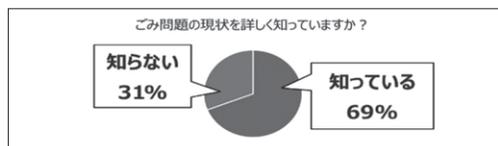
不燃物の埋立場跡地に作られた植物公園（大分市東部）

(3) 取組のゴール（目標）

ごみ問題は1年限りの調査研究で終えることはできないほど、大きな問題でもあります。問題解決に向けて、「自分ゴト化」「共感」できる取組とするため、次の2つを実践します。まずは、ごみ問題の現状を知ってもらう情報発信活動に取り組みます。次に、発生を防ぐことのできないごみは、しっかりと分別し、資源物としてリサイクルする活動にも取り組みます。この2つの取組を、自分たちだけではなく、沢山の方々と協働して実践することで『安心して生活できる未来生活の環境づくり』に繋げることを、取組のゴール（目標）とします。

4. SNS を利用した情報発信活動

多くの方にごみ問題を「自分ゴト化」してもらうための手法として、利用者が増加傾向にあるSNSを活用して、ごみ問題の情報を発信することにしました。Google フォームによるアンケート調査を10代から50代までの方213人に行いました。すると、ごみ問題の現状を知らない人が約7割、ごみ問題が未来の生活へどんな影響を与え



Google フォームによるアンケート
(実施期間 2021.01.20 ~ 2021.02.01 回答数 213)

るか分からない人が約4割いることが分りました。こうした現状から、ごみ問題の現状を知ってもらい、未来生活のために具体的な行動ができるよう、情報発信をしていくべきと考えました。



Instagramページへ Twitterページへ Facebookページへ

ごみ問題の現状と未来、日々の生活で取り組んでほしいことなどの投稿で、閲覧者がごみ問題解決へと行動に移せるように進めていきます。

5. 分別のための「ごみ箱の見える化」

ごみの分別ができない理由として、生徒が考えたことは、「ごみを捨てる前のアプローチが弱いのではないか？」ということです。生徒には、ごみを分別できるような新しいアプローチを考えさせましたが、斬新なアイデアはなかなか出てきませんでした。とにかく、新しいアイデアを生み出すまで考えさせた結果、ごみ箱を透明にするというアイデアが生まれました。

アクリル板を使用して手作りした「透明ごみ箱」を学校敷地内にある自動販売機横に、令和2年6月1日～14日までの2週間設置し、分別状況を調査しました。設置期間中、大分市役所ごみ減量推進課の担当者に来校していただき、設置位置や分別表示などを改善しながら実施しました。その結果、分別状況が大幅に改善されました。特に、ペットボトルラベルがしっかりと剥がされていたことや飲み残しがなくなったことは、大きな効果でした。



本校敷地内にある自動販売機横に設置した透明ごみ箱

大分市役所ごみ減量推進課に、分別が改善された効果や設置位置の改善する意向を報告すると、「市役所にも設置してみてもどうですか？」とオ

ファーをいただき、大分市役所4階エレベーターホールでの設置ができることとなりました。「透明ごみ箱」は現在も設置していただけていますが、徐々に分別状況が改善しています。今後もごみ箱の形状や表示の改良を重ねることで、分別しやすいようにしていきたいと考えています。



大分市役所4階エレベーターホールに設置した透明ごみ箱と分別表示の掲示の様子

大分市役所4階エレベーターホールにおける「透明ごみ箱」の設置により、ごみ分別の状況が改善されたことから、他の施設への設置を行い、多くの方の分別意識を高めたいと考えました。そのため、大分市役所ごみ減量推進課からのアドバイスをいただき、次なる設置場所の候補として、コンビニエンスストアを検討することになりました。



協力店舗での打合せの様子

コンビニエンスストアに設置されているごみ箱の分別状況は悪く、家庭ごみの持ち込みもあることも分かりました。こうした状況を解決するため、コンビニエンスストアで捨てられるごみを、きちんと分別し、資源物としてリサイクルできる活動の実践を考えました。株式会社ファミリーマート大分営業所を訪問し、活動実践への協力を依頼すると、快諾していただきました。設置に協力いただける6店舗との打合せでは、各店舗へ持ち込まれるごみの分別状況は、食べかけの弁当などが入っていたり、飲み残しのペットボトルが捨てられたり、ネット通販商品の空箱や靴、本などのごみも捨てられていることが分かりました。

各店舗との打合せを終え、サイズ、蓋の製作など、大分市役所に設置していた透明ごみ箱を改善すべき点が分かりました。早速改良し、令和3年4月17日から市内6店舗のファミリーマートに、



設置期間中の巡回の様子

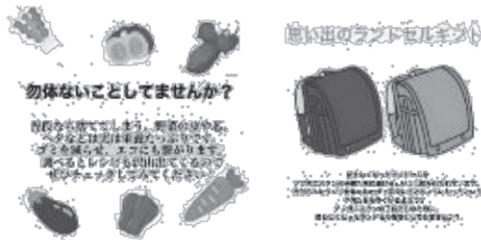


設置した透明ゴミ箱

「透明ゴミ箱」の設置が始まりました。設置期間中は、生徒がシフトを組んで各店舗へごみ分別状況をヒアリングにうかがっています。各店舗のオーナーさんからは、「設置前に比べると、明らかに分別状況が改善されている」との報告を受け、透明ゴミ箱の効果を実感することができました。

6. 活動の成果

地域における課題を調査し、その解決に向けて個で取り組むのではなく、他者と協働しながらチームで取り組むため、「自分ゴト化」「共感」というキーワードの基に活動してきました。透明ゴミ箱設置と SNS による情報発信活動は、現在も活動を続けています。生徒には、他人事ではなく、自分自身の問題として捉えさせるため、「君たちならどうする?」と、常に投げかけています。



SNS で投稿している作品

活動を開始した頃には、なかなか思考が深まらず、「先生、分からん。難しい」「自分たちには絶対無理です」といったコメントばかりが返ってきていました。しかし、ブレインストーミングや KJ 法などの手法を使い、チームでアイデアを出させる工夫をした結果、徐々に生徒自身のアイデアが飛び出すようになりました。部員の中にそうした生徒が 1 人でも出てくると、他の部員も影響を受け、アイデアが飛び交うようになり、現在では熱い議論を交わせるようになってきています。そして、部員全員でまとめたアイデアを、大

分市役所やファミリーマートなどの外部機関に伝える機会も増え、コミュニケーション力・プレゼンテーション力・行動力なども身につけることができます。発見した諸課題を「自分ゴト化」し、相手にうまく伝えることができ、「共感」してもらえる機会も増え、生徒の自信にも繋がっているようです。

活動を通じて生徒の成長を感じながら、協力していただいている多くの方からの反応もあり、活動の手応えも感じています。今後は、ごみを資源として活用した「アート作品の制作」を、大分県立緑丘高等学校美術科の生徒と協働しながら挑戦していきます。そして、取組のゴール（目標）としている『安心して生活できる未来生活の環境づくり』の達成を目指します。

7. おわりに

社会問題をテーマにした課題解決型学習は、今後も継続していきます。SNS を活用した情報発信は、発信内容を再検討し、閲覧者を増やしていく工夫をしていきます。そして、学校だけにとどまらず、生徒たちの思考から生まれたアイデアを積極的に発信し、外部機関とも連携を図っていく予定です。

これまで、生徒自身の見聞・経験・観察・考えを基に、問題を見つけさせ、興味のあることや、面白いと思ったことを大切にさせながら活動させてきました。この手法は、目の前の事象や課題に対して、「どうやって対応していくか?」「どうやって解決していくか?」を考え、行動していくためのトレーニングにもなります。そして、主体性や実行力が身につく、チームで活動することで働きかけ力も身につけられます。

今後は諸課題に対して、考え抜き、前に踏み出すためには、個ではなくチームで動くことが「人生 100 年時代の社会人基礎力」の中でも求められます。本取組で、こうした力を生徒に身につけさせる必要があることを、強く実感しました。

本校商業調査部の取組が、みなさんの教育実践の参考になれば幸いです。